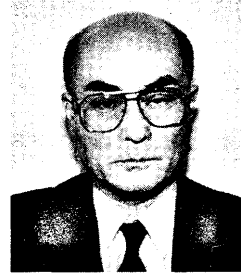


# 中学校段階の役割の基本を どうとらえるか



上越教育大学教授 高田喜久司

## 具体化のポイント

- ① 教課審が、「中学校段階の役割」を初めて答申したことは画期的である。とかく中学校は「高校に入学するための通過点」と消極的にとらえられがちだったからである。
- ② 「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度」の内容は、「生きる力」を育む基礎・基本と指定したい。生きる力を育むためには「生徒に活力を与える」教師の配慮が緊急の課題である。
- ③ 各中学校は「生徒が輝き・生徒の学びが生きる」カリキュラムを具体化しなければならぬ。そのための中学校教育活性化の基本的な観点について素描した。

## 中学校教育の問題点 に対する危機意識

教育課程審議会（教課審）は平成一〇年七月二九日、「幼稚園、小学校、中学校、高等学校、盲学校、聾学校及び養護学校の教育課程の基準の改善について」答申した。答申内容は多岐・多彩にわたっているが、教育課程の基準の改善に当たっての基本的な考え方として、「各学校段階の役割の基本」について明示したことは画期的であり、高く評価できよう。各学校段階の役割を明確にすること

は、実は、各学校段階間の接続・関連を図りながらそれぞれの学校段階の独自性を知ることができる点で重要であり、その意義は大きいのである。

しかしながら、教育課程の基準の改善で、従来、各学校段階の役割が明確に打ち出されたことはなかった。たとえば前回の昭和六二年の教課審答申では、教育課程改善のねらいの第一に「豊かな心をもち、たくましく生きる人間の育成を図ること」を掲げ、その育成のために「各学校段階においては、幼児児童生徒の発達の状況や各教科等の特性に応じて、こ

これらの指導の充実に努めなければならぬ」と述べられている。

この例示の文言から明らかなように、各学校段階の役割は明示されておらず、それぞれの学校段階で独自に適切な対応をしていたと解されるのである。

ただ、明確ではないにしろ、とくに中学校については「学校教育法」のなかで、おおむね「小学校教育の基礎に立って、義務教育の最終段階として、国家・社会の形成者としての必要な資質を養うとともに、社会に必要な職業についての基礎的知識・技能、将来の進路選択能力を養うこと」が強調されており、これによって中学校の役割や機能をうかがい知ることができる。ここには、「義務教育の最終段階としての中学校」の役割がみられる。

新制中学校が創設されて五〇年が過ぎた。ところが、中学校はとかく小学校と高校に挟まれた「谷間的な感覚」あるいは「高校にいくための通過点」ととらえられ、最近とみにそのあり方が不明確であいまいなのである。本来、思春期から青年前期の多感で揺れ動く重要な時期にある中学生に対する教育的使命は大きい

にもかかわらず、実際には、「偏差値の高い高校に入学するための準備機関」として変質を遂げている実情にある。

義務教育の最終としての仕上げから高校進学のための中学校へと変質したのは、高校進学率が九〇％を超えた昭和五〇年頃から顕著になったといわれる。他方、多くの熱心な教師が多忙な日常に身をおき、悪戦苦闘しているにもかかわらず、沈黙化することのない不登校・いじめ・校内暴力、さらには授業崩壊、新しい子どもの荒れ、学びから逃走する子どもとの状況に対する危機意識からの脱却を図るべく、改めて各学校段階の役割の明確化が意図されたといえる。

### 中学校教育の 役割の明確化

今回の答申で、中学校教育の役割の基

本は、明確に次のように定められた。  
「中学校においては、義務教育の最終段階として、また、中等教育の前期として、個人として、また、国家・社会の一員として社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度を確実に身に付け、豊かな人間性を育成するとともに、自分の個性の発見・伸長を図り、自立心を更に育成していくことが求められていること」。

ここに提示されている中学校の役割は、次のように理解される。

第一は、小学校教育の基礎のうえに立って中学校は、「義務教育の最終段階として」完結する性格とともに、「中等教育の前期として」高校へと連続する性格をもっている。ここに小・中・高と連続したいわば生涯学習の一環として位置づけられている中学校観が読み取れる。

第二は、発達段階に即して、「豊かな人間性」や「個性」、ならびに「自立心」の育成という小・中・共通したキーワードの達成が意図されていることである。

第三は、小・中・共通に「個人として、また、国家・社会の一員として社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度」を身につけることが構想されている。

発達段階を考慮して小学校では知識・技能・態度の「基礎」を、中学校ではこれらの能力を「確実に」身につけることが重視され、高校にはこうした文言は見当たらないことに留意しなければならない。

第四に、今回答申の中学校の役割でとくに注目すべき新しい提言は「個性の発見・伸長」と「自立心」の育成という後半部分にある。すでに触れた義務教育の最終段階としての役割、豊かな人間性の育成などはこれまでも強調されてきたことであり、新鮮味は薄いといえよう。

### 「生きる力」を 育む基礎・基本

では、中学校で「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度」の確実な習得とは何か。これは各教科の「知識・技能・態度」にあたる部分(内容知)を特別に取りだして、それを徹底して教師が習熟・定着させることを想定しているのではなからう。また、生徒の学びに生きて働く知識・技能の重要性を否定できないし、生きて働く知識・技能が望ましい態度、ひいては豊かな人間性の育成に資することも承知しているが、具体的に何を意味するかは確定しにくいのである。

ただ、答申のなかには「社会生活を営む上で最小限必要な基礎的・基本的な内容の確実な習得と定着を図る」と類似の

表現がみられる。「知識・技能・態度」を「基礎的・基本的な内容」とおきかえているのである。

ここでは、異論のあることを承知で「社会生活を営む上で必要とされる知識・技能・態度」を、あえて「生活力」あるいは「生きる力」と措定しておきたい。したがって小学校段階では「生きる力の基礎」を、義務教育の完結としての性格をもつ中学校は「生きる力」を育む基礎・基本を「確実に」習得するものでなければならぬ。

したがってこの文言は、「ゆとりのなかで生きる力の育成」や「自ら学び、自ら考える力の育成」という「学び方」重視の観点、さらに生徒一人ひとりがかけがえない人間として実感でき「存在感と自己実現」の喜びを味わえる学校像等々の教育潮流と無縁ではない。

### 中学校教育活性化 の基本的観点

これまで触れたことを前提として確認しつつ、中学校教育活性化の観点から各学校の対応課題について若干検討したい。

#### (1) 中学校教育活性化の方向

高校への準備教育へと変質した中学校は、多くの知識を教えこむことになりがちであった。これでは生徒の「学び」が生きる意図は薄くなる。これからの中学校教育は「自ら学び、自ら考える力」を育成する方向へと転換を図りながら、豊かな人間性の開花に期待しなければならない。そのための対応課題は次のようである。

第一は、生徒に活力を与える配慮をすることである。生徒に活力がなければ生きる力の育成は期待できない。教師は生徒一人ひとりがかけがえない存在であるという共通認識に立って、生徒と教師、生徒相互の心の交流を図る場と機会を意図的につくっていく構えが重要である。非行・いじめ・不登校が跡を絶たない実情において、生徒にいかに活力を与えるかは緊急の課題である。

第二は、教育計画あるいは指導計画の改善である。ゆとりのなかで生きる力を育成する観点から、どのような学校像や生徒像をイメージし、生徒の学びを生かした「私のカリキュラム」をデザインできるかが問われている。そのためには、

教育内容の厳選による基礎・基本の明確化、カリキュラムの大綱化・弾力化を實質化する「特色ある学校づくり」を視野に入れなければならない。

とくに完全学校週五日制下では、学校・家庭・地域社会の連携のうえにたつて中学校の役割を特定するとともに、各学校の独創性を発揮した教育課程をどのように構成するかが重要なポイントとなる。

## (2) 教育内容の厳選と基礎・基本の明確化

各学校では、教育内容の厳選を図って基礎・基本を明確にしなければならない。基礎・基本は中学校教育の重要なファクターを占めているのである。

教課審答申の厳選例を参考に、教科等の特性、学校の教育方針、生徒の実態、地域社会の実情をふまえて各学校独自の基礎・基本を析出する必要がある。

その際、生涯学習の一環として今回の答申が体験的・問題解決的な学習とならんとともに、調べ方や学び方を育成する学習を活発に導入する提言をしたことにかんがみ、「学び方」・「考え方」（方法知）重視の観点から教育内容の厳選と基

礎・基本を見直す配慮も急務となろう。

また、総合的な学習や課題選択学習などの学習活動は教科横断的・総合的な性質を有するため、教科を越えて全教職員で基礎・基本について共通理解を図ることが望まれる。このことは、中学校教師の役割自体を変化させるものと考えられるのである。

## (3) 個性重視の学習指導の充実

「個性についての理論は美しいが、実践は困難である」。現在でも「個性を生かした教育の充実」をスローガンに掲げ実践が展開されているが、「進まぬ個性重視、求められる学校の創意工夫」とマスコミに揶揄されている実情にある。今後の教育はなによりも、多様なニーズに即応した活力ある中学校を創造することが課題である。

この課題解決のためのキーポイントは、まず教師が柔軟で多様な学習活動をデザインできるかどうかである。次に、デザインされた多様な学習活動のなかから、生徒が自己選択・自己決定できる機会と場をいかに提供できるかに依存する。こうした条件を可能にする授業には、

課題選択学習や習熟度別指導、体験活動の重視、ティーム・ティーチング（T・T）等が考えられる。ここではT・Tに限定して検討してみたい。

一定の知識・技能の効率的な定着は、一斉授業によって可能である。しかし、生徒の個性を重視したり、生きる力を育む授業は、生徒の興味・関心・意欲を尊重し、さらには生徒の多様なニーズに応えなければならず、一斉授業では限界があろう。

つまり、T・Tは学習活動を多彩にし、生徒は複数の教師と出会えること等、授業の個性化・柔軟化・多様化をねらいとする学習形態である。一人ひとりの生徒の学びと教師の支援を可能とする有効な指導法といえよう。T・Tに対して、「細かい点まで行き届いた指導をしてくれる。多様な学習活動や一人ひとりに応じた指導が受けられ、授業が楽しい」という生徒の感想に注目したい。

ともあれ、各中学校は「生徒が輝き・生徒の学びが生きる」カリキュラムをどうデザインするかが、いま問われているのである。